

「さくら」

堀 亮運

「明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは」

親鸞聖人が9歳の時、得度の際に詠まれた句だと言われております。

日々の暮らしの中で、様々なことを明日すればいいかなと、先延ばしにしてしまう事、あるのではないのでしょうか。

これは、今日できることは明日も同じように出来るものだと、ほとんど何の疑いもなく思い込んでいるからに違いありません。

むしろ、「明日が今日より良くならなくても、同じくらいかちょっと悪くなるくらいなら十分満足だ」と思っている自分は謙虚な人間なのではないか、と思ってしまう程に「明日あり」というつもりで私は日々を過ごしております。

毎年、桜の季節が来ると、私はこの親鸞聖人が詠まれた句を思い出します。

そして、わが身のあり方も振り返らなければ、という思いが湧いてまいります。

すると、「明日あり」どころではなく、今この瞬間がある事自体、得難いご縁を頂いている、とても有る事が難しい「有り難い」状況の中に身を置かせていただいているのだ、という事がありありと見えてまいります。

人の心とは、ままならないものですから、様々なご縁を頂いたその時は「本当に有り難いご縁を頂いた。」とっていた筈なのに、いつの間にかそれが当たり前の普通の事になってしまう、そんな私の姿でもあります。

こうして、親鸞聖人が詠まれた句を思い出しながら、今という瞬間を頂いている有り難さを感じつつも、桜を眺めながら「明日はどこでお花見しようか」と考えている私がおります。